

作品番号…1

作品タイトル…屋上の風

選択画像…A 松坂屋屋上遊園

この時間なら、きつと大丈夫だろう。

向井次郎は誰もいない屋上遊園を見回し、白髪頭の汗をハンカチで拭った。背広の上着を脱ぎ、ネクタイを緩める。

残暑真っ只中の昼下がり。カラフルな乗り物たちも夏バテして見える。

係員はこちらに背を向け、熱心に仕事をしている。家族も階下で買い物を楽しんでいるはずよし。

手始めに近くのSLに跨り、小銭を入れる。陽気な音楽が流れ、SLは軽快に動き出した。座席の足元に革靴がつかえて思わず苦笑する。

あれから随分時が経ったものだ。

子どもの頃はデパートの屋上遊園もお子様ランチも、自分には関係無いものだと思っていた。さりとて、大人になった今では旗の立ったお子様ランチは頼めないし、乗りたかった空飛ぶゾウも無い。

まあいい。今はこの時を存分に楽しもう。時間はまだ沢山ある。

ミニ新幹線を降りたところで一服する。すっかり汗だくだが、屋上に吹く風は思ったより涼しく心地いい。

人工芝に横たわり、広々とした空へ手を伸ばす。皺だらけの手が見える。

本当に、自由になったんだなあ。

学校を卒業してから毎日がむしろに働き、気づけばもうこんな歳になっていた。

父親の借金を返し、小さいながら自分の会社を作り、そこからまた働いて……。やりたかった事、食べたかった物、行きたかった所、どれも子どもの頃に置き去りにしたまま生きてきた。妻にも苦勞をかけた。贅沢も旅行も満足にさせてやれなかったが、愚痴ひとつ言わずついてきてくれた……。

「じいじ」

思いを巡らせていると、小さな手が目の前に差し出された。

「お父さん、どうしたの。探したよ」

娘と孫が笑顔で覗き込んでいる。

「そろそろレストランの予約時間よ。今日は退職のお祝いちゃんとさせてね」

「ぼくお子様ランチ食べたい！」

「じゃあ、じいじも」

「じいじも？」

「旗、欲しいからな」

孫が声を上げて笑った。向井もつられて笑った。

その声が屋上遊園に明るく響いた。

作品番号…2

作品タイトル…屋上を渡る風

選択画像…A 松坂屋屋上遊園

十八年前、私は小さな息子を連れて、北関東の田舎町を出た。自分ひとりでも息子に不自由な思いをさせまいと、トヨタの工場で働くことを決め、愛知に移り住んだ。

「おかあさん」と呼ばれるたび、愛おしさと同時に、胸の奥が心細くなった。この子を守るのは、自分しかない。眠れない夜もあった。それでも朝が来れば仕事へ向かった。自分を頼る幼い声に背中を押され、私は歩いてきた。

愛知に来て間もない頃、息子を連れて松坂屋の屋上へ行った。

名古屋土産の「ゆかり」を買い、ベンチで二人並んで食べた。海のない県で育った私には、海産物の入ったお菓子が珍しかった。袋を開けたときの香ばしい匂い。「エビの味がする」と嬉しそうに言った息子の声が、今も昨日のことのように浮かぶ。

帰り際、売り場で一枚のスカーフに目が留まった。鮮やかな色が重なる美しいスカーフだった。心惹かれたけれど、値札を見て目を伏せた。家賃、食費、息子の靴…必要な出費だけで手いっぱい。欲しいものを諦めることには慣れていた。隣で息子が、不思議そうに私を見上げていた。

「行こう」

笑って、小さな手を握った。

あれから十八年。

「仕事、早く終われるから、松坂屋の屋上で待ち合わせよう」

名古屋で働き始めた息子からの誘いだった。

私は、あの日と同じ「ゆかり」を買って屋上へ向かった。ふわりと風が吹いた。

「おかあさん」

幼い声が聞こえた気がした。

振り返ると、遠くから息子が歩いてくる。手には松坂屋の紙袋を下げている。

「明日、誕生日でしょ。これ」

中に入っていたのは、一枚の鮮やかなスカーフだった。

欲しいとも、きれいとも、あの日は一言も言わなかったのに。十八年前の私を、息子は覚えていたのだろうか。

あの頃、守るのは私だと思っていた。けれど、もしかしたら、ずっと守られていたのは私のほうだったのかもしれない。

風にスカーフが揺れた。

「似合うよ」

息子が笑った。

私は「ゆかり」を一枚、息子に差し出した。

作品番号…3

作品タイトル…太陽の子

選択画像…A 松坂屋屋上遊園

二十代後半、老け込む歳ではないとわかっているが、この歳になると名古屋の日差しは堪える。デパート松坂屋の屋上遊園地。子供の頃はよく父親に連れてこられたものだが、今より涼しかった気がする当時は、日差しなんてものともせず遊び回ったものだ。

「パパも来てより！」

「わかったわかった！ いま行くよ！」

わたしは呼ばれるまま日差しの中へ飛び込んだ。

今ではわたしが父親となり、息子にせがまれてここへ連れていくような歳になった。しかし、この景色はわたしが知っているものと大きく変わっている。

昔はコイン遊具が並んでいた遊園地は、今ではアスレチックや雲梯まで置かれ、ちょっとした運動場のようになっていた。

名古屋は酷暑で有名だ。わざわざ炎天下の屋上で運動をさせなくても、と思ってしまう。

「おい、暑くないか。ゲームセンターとか涼しいところで遊んでもいいんだぞ」

アスレチックで身体を動かし続けている息子に思わず問いかけた。

「ここがいい！ いっぱいうんどりたい！」

返ってきたのは、太陽にも負けない息子の笑顔だった。

もう一度、遊園地を見回す。すっかり様変わりしたここは、それでも子供を楽しませ続けているということだけは変わっていない。

視界の奥に、コイン遊具を見つけた。昔、父に連れられて来たわたしが遊んでいた遊具は今でもそこに置かれていた。

ああ、もう一つ変わらないものがあるかもしれない。

「じゃあ、パパといっぱい遊ぼうか！」

息子の笑顔が見たいという父の想いも、きっとあの頃から変わらないだろう。

作品番号…4

作品タイトル…閉園間際のお客様

選択画像…A 松坂屋屋上遊園

名古屋の夏は、今年もうだるような暑さだ。

私が警備を務める栄の松坂屋は、夕方になっても涼を求めるお客様で混みあっていた。喧騒から離れ、屋上の見回りに向かう。この百貨店には、全国的にも珍しい屋上遊園がある。昨年、四十七年ぶりにリニューアルしたことが話題となり、週末は子ども連れで賑わう。私も何度か休日に、小学生の息子を連れてきたことがあった。

屋上に着く。外はまだ気温が高い。閉園時間も近いため、もう誰もいないだろう。そう思ったが、予想に反して屋上には一組の親子がいた。

「すみません、そろそろ……」

声を掛けようとしたが、随分と遊びに集中しているようだった。

「こうかな？ それともこう？」

幼い子どもが、新しくできた身体測定コーナーで、身長を測る壁の線をなぞってみたり、体前屈の台の上で飛び跳ねてみたりしている。母親は、正しい使い方を教えるわけでもなく、ただそばで我が子を見守っていた。

ひとしきり遊具で遊んだあと、止まったままのコイン遊具に乗って、子どもは母親に手を振った。

「ママ、あの子の言ったとおりだね！ おくじょうゆうえんって楽しいね！」

無邪気な感想に口元が緩んだ拍子に、足元で安全靴がキュッと音を立てた。

ハッとして親子が振り向く。驚いたことに、その顔は人間にしては白く、ハートのような形をしていた。

「あーあ。見つかったちゃった」

「さ、遊びは終わり。帰りますよ」

親子の姿はみるみるうちに小さくなり、やがて二羽の鳥となって空へ飛び立った。

誰もいなくなった屋上で、私はひとり、目を擦った。

家に帰ると、息子が一枚の絵を見せてくれた。今日遊びに行った東山動植物園の思い出を描いたという。

「ボクが屋上遊園のことを話したら、楽しそうに聞いてくれたんだ」

画用紙には、白と茶色の色鉛筆で描かれた、メンフクロウの親子の姿が。

私はその絵に向かって、小さくお辞儀をした。

「またのお越しをお待ちしております」

作品番号…5

作品タイトル…魔法を忘れた魔法使い

選択画像…A 松坂屋屋上遊園

「メイクは魔法。私は魔法使いになる」

そう夢見て入社したコスメブランド。けれど現実は厳しい。

「ここは遊び場じゃないの」

先輩の鋭い声が、耳にこびりついて消えない。

今月もノルマは未達成。慣れない夜会巻きのヘアピンで頭も痛いし、ヒールで立ちっぱなしの足はへロへロだ。

「私には向いてないのかな……」

制服のポケットには、昨夜書いた辞表が入っている。

昼休憩。食欲のない私の足は、吸い寄せられるように本館八階の屋上遊園地へ向かっていた。

子供の頃、ここへ来るだけで世界が輝いて見えた、夢いっぱい場所。

「はあ……」

俯いていると、チリンと涼やかな鈴の音が響いた。

見上げると、ミニ新幹線が光の粒子を纏ってゆつくりと走り出し、車掌さんがふわりと降り立った。

「おや、魔法を忘れてしまったのですか？ 魔法使いさん」

車掌さんが、そっと語りかけてきた。

「魔法……。私、魔法使いにはなれないのかも」

私が呟くと、車掌さんは小さく首を傾げた。

「子供たちがこの場所で目を輝かせるように、大人の女性たちもコスメに胸をときめかせる。あなたはそれお手伝いができるんでしょう？」

「あ……」

そうだ。私が売っているのは、ただの商品ではない。あの頃の私がここで感じたような、ワクワクとときめきなのだ。

「あなたも、立派な魔法使いですよ」

車掌さんが帽子を掲げると、彼は光の粒となって消え、いつもの賑やかな屋上に戻っていた。

「……そうだ。メイクは魔法。私は、魔法使い」

前を向く決意をして、破り捨てるためにポケットの辞表へ手を伸ばした。

「あれ？」

指先に触れたのは紙ではなく、取り出すとそれは一本のリップに変わっていた。私の大事な魔法の道具。

「よし」

腕時計に目をやる。そろそろ戻る時間だ。

自分自身に最高の魔法をかけよう。

遊び場じゃない。私が魔法をかける場所へ。私は背筋を伸ばし、魔女の誇りを纏って一階の化粧品売り場へ歩き出した。

作品番号…6

作品タイトル…夢

選択画像…A 松坂屋屋上遊園

西日の差し込む屋上に足を踏み入れた瞬間、懐かしい風が頬を撫でた。

「パパ、見て！あっちに新幹線があるよ！」

息子の翔太が、僕の手を引っ張り駆け出していく。名古屋の街を一望できる松坂屋の屋上遊園地。リニールアルされたと聞いてやってきたのだが、明るい人工芝の奥にその姿を見つけた瞬間、胸が大きく跳ねた。

艶やかに塗り直され、ピカピカに磨き上げられた新幹線型のコイン遊具。

塗装こそ綺麗だけど、少し丸みを帯びたフォルムは間違いなく僕が幼い頃に乗っていたものだ。当時はガタガタと大きな音を立てて線路を走っていたあいつが、大切に磨き直されて残っていたのだ。

あの日も、こんな晴れた土曜日だった。

仕事が忙しくて中々休めない親父が、仕事の調整をして連れてきてくれたこの屋上で、僕は夢中になってハンドルを握りしめていた。百円玉で動き出す小さなコックピットから遠くの街並みを眺め、運転士になったつもりで指をまっすぐに伸ばして「出発進行！」と叫んでいた。

「パパ、これ乗っていい？」

翔太の声でハッと我に返る。

「ああ、もちろん」

ポケットから百円玉を取り出し投入口へ滑り込ませると、ガタゴトと懐かしい振動が始まった。

「出発進行ー！」と無邪気に前を指さす翔太の姿が、かつての自分と鮮やかに重なる。

仕事でいつも着ている僕の制服のポケットには、本物の新幹線の乗務手帳が入っている。

あの日この小さな座席で抱いた「新幹線の運転士になる」という夢を、僕は叶えたのだ。

毎日何百人もの乗客と大きな夢を乗せて時速三百キロの新幹線を走らせる僕がいるのは、あのとき胸いっぱい膨らんだ、小さなワクワクを失わなかったからだ。

夢は叶う。わくわくを持ち続けられ。

綺麗に生まれ変わった屋上で、新幹線を見つめる翔太の横顔を見つめる。

かつて親父が僕に繋いでくれた未来への切符を、今度は僕がこの手で、息子へと渡していく。きみの夢はなに？　なににだってなれるよ。

いよいよ俺達の番が回ってきた。

手早くギターのセッティングとチューニングを済ませる。被り物の中、俺は内心で悪態を吐いていた。秋口とはいえ、とにかく……暑い。

松坂屋の屋上遊園。そこで行われるアコースティック・セッションの三組目。

「場所柄からして、子どもが多いと思うの。あんた達の顔面は厳つすぎるから」

そう告げたボーカルの佐知子は、涼しげに譜面をチェックしている。まったくもって、恨めしい。ジャンケンに勝ったドラムの幸次に視線を送る。頭部がレックスーパーパンダだ。何回見ても、まだマシだと思えた。俺のウサギと、今からでも交換してほしい。

演奏が始まる。幼児向けのアニメソングなんかも採り入れたおかげか、子どもの反応も良さそうだ。

何気なく見渡した中に、かつての知り合いを見つけてしまった——指がもつれかける。

間違いない。十年前に別れた彼女。その人が、小さな男の子を抱いて幸せそうに笑っていた。酷い別れ方をした。ずっと後悔していた。

風の噂で、結婚したことは耳にしていた。まさか、こんな再会をするなんて。まさか、演奏後に彼女のほうから近づいてくるなんて。

撤収作業のためにしゃがみ込んでいた俺は、その場から動けずにいた。

彼女の肩越しに、「松坂屋」の看板の文字が押し掛かってくるような気がした。

被り物の中で、息が荒くなる。まさか、俺だと気づいて。

「この子、ウサちゃんが大好きなんです」

その笑顔は、十年前と何も変わっていないかった。

彼女の腕の中、ウサギさんに向かって振られる小さな手に向かって、俺は全力で両手を振り返していた。

汗だくで被り物を脱いだとき、佐知子がかうように声をかけてきた。

「いつも無愛想なのに。あんなにレス返すなんて、珍しいじゃん。知り合い？」

「元カノなんだ」

目を丸くしているメンバーを後目に、手の甲で汗を拭う。今日の打ち上げで飲むビールは、最高に美味いに違いない。

神経質な子どもだった。冷えたおかずは食べられないし、お皿にかけてあるラップに付着した水滴に恐怖を感じていた。大人になった今でもちょっと苦手だしなるべく避けたい。

「お赤飯食べやあ」

祖母がバスに乗ってわざわざ買いに行く、孝和堂本店のお赤飯。これもあまり得意ではなかった。赤飯自体は好きでも嫌いでもないのだが、パックをぱかっと開けたとき、蓋の部分にしっとりこびりついた水滴と、濡れた米粒が食欲を削いだ。祖母の手前、何でもないふりをして口に運ぶ。

「おせきはんおいしい」

そんな言葉とは裏腹に、口腔内にほんの少しダメージを与える冷たい水。まだほんのり温かい赤飯を丸飲みした記憶。祖母に向かって作り笑顔。じゃり、と奥歯で噛んだごまの味がプラマイゼロにしてくれた。

祖母が亡くなってしばらく経ち、何の因果か、中村公園駅のすぐそばで働いている。毎日眺める大鳥居の奥にはまだ行ったことがない。

ある日、孝和堂本店の前を通り掛かったとき、私はひとつの賭けに出た。今なら美味しく食べられるかも知れない。

「お赤飯ひとつください」

手渡された袋越しの熱はパック上部の水滴に直結しており、あの頃の恐怖心を思い出す。しかし私はもう大人だ。パックからお椀に移してレンジで温めることができる。

ごましおをふりかけてひとくち。咀嚼しながら、祖母の記憶を掘り起こす。祖母の家のにおい、祖母の控えめな笑い方、入れ歯洗浄剤の色、市営住宅の狭い台所でセブンスターを吸っていた祖母の横顔、めっちゃファンキー。

「お赤飯食べやあ。あんた好きでしよう」

祖母は私のためにわざわざバスに乗って中村公園まで通っていたのだ。孫の好物であろう赤飯を買いに。すれ違っていた祖母の想いと孫の気遣いが、三十年の時を経て今、ぶつかる。

お赤飯、思ったより美味しいな。次は鳥居の奥まで行ってみよう。

作品番号…9

作品タイトル…ゲート

選択画像…B 中村公園駅前大鳥居

名古屋に住みはじめて九年。僕にとってこの街は、摩耗していくだけの灰色の器だ。

「……はあ」

営業帰り、乾いたアスファルトを踏み締めながらため息を吐く。

残業続きで心はすり減り、同居する恋人の春奈とも、ここ数週間はまともな会話すらない。メッセーシアプリのやり取りもお互いスタンプひとつで終わり。感情の通わない冷たい画面を見つめるたび、胸の奥がずっしりと重くなった。

思考停止し、ただロボットのよう歩いていた、その時だ。

「……え？」

不意に視界が開け、僕は足を止めた。

高層ビル群の隙間、大通りが交わる交差点の真ん中に、巨大な朱色の鳥居が聳え立っていた。なぜ今まで、この存在に気づかなかったのだろう。

呆然と見上げる僕の耳に、アスファルトを叩く軽快な足音が響いた。

トントン、と。

鳥居の向こうから、光の粒子をまとった半透明の小さな狛犬が、楽しげにステップを踏んで横断歩道を渡ってくる。

驚いて周囲を見回したが、行き交う人々は誰一人、狛犬に気づいていない。

狛犬は僕の足元でピタリと止まると、くりくりとした瞳で僕を見上げた。そして、じゃれるように僕の膝に頭を寄せた。

陽だまりのような熱が、じんわりと染み込んでいく。

その瞬間、僕の心を縛っていた重苦しい焦燥感が、嘘のように弾けて消えた。

『少し、休んだら？』

風の鳴るような声が耳元で響き、狛犬は光の尾を引いて大鳥居の向こうへと消えていった。境界線の向こうから、優しい風が吹き抜ける。張り詰めていた僕の口元がふ、とゆるむ。

「そっか。僕、勝手に背負い込んでたな」

スマホを取り出し、事務的な連絡ではなく、ずっと言えずにいた本当の言葉を打ち込む。

『今夜、久しぶりに一緒においしいものを食べに行かない？会いたい』

一秒で、既読がついた。

『うれしい！ 楽しみに待ってるね』

見上げる大鳥居の向こう、灰色だった名古屋の空が、今はどこまでも青く眩しく広がっていた。

戸惑った。そりゃ“大”鳥居とは聞いていたけれど。

愛知に生まれ育って二十六年、中村公園駅の三番出口に立ち、私は今初めて大鳥居をこの目で見ている。視界に収まりきらず遠近感が狂う。その驚きを隣にいる純くんにわあわあ伝えたが、幼い頃からこの景色を見慣れている彼はぼかんとして、

「居酒屋、あそこの横断歩道渡ってくから」

と指さした。今日は彼が大学の頃から通っているという居酒屋に行くのだ。

歩き始めてすぐ、

「あれ、母さんじゃん」

と純くんが呟くのと、スーパーから出てきた女性が「あ」の口で動きを止めたのが同時だった。そうか、ここは彼の実家の近く、でもおかあさんにこんな形で会うなんて。

「こんばんは、初めまして」私は直線になり、高速でお辞儀をした。

「これ、母さん」「こちら、お付き合いらしてる服部穂波さん」純くんはいつもの調子で紹介した（私は彼が慌てているところを見たことがない）。

おかあさんは顔をぱあっと広げ、一秒後にくしゃくしゃにした。

「まあこんなところで！初めまして純也の母です。あら私、こんなそこらへんの「シャツで恥ずかしい。穂波さんのことお聞きしていますよ。お会いできて嬉しいわ」そして持っているエコバッグをさがそ探り、

「これ食べる？好き？シュークリーム」

と差し出した。

「母さん、俺ら今から晩飯食うところだから」純くんが柔らかく遮り、私は笑ってしまいながらお礼と挨拶を繰り返しておかあさんと別れた。

「おかあさん、明るいね」

「いつもああだよ」

どきどきを残しながら、大鳥居の真下の横断歩道を渡る。

居酒屋への道を歩きながら振り返ってみる。純くんの今までの話に何度か出てきていた「大鳥居」。彼のようにさらりと会話に溶け込ませることは私にできるだろうか。

たぶん、十年後くらいには、できている気がする。

夕暮れにどかんと立つ大鳥居を見つめてから、数歩先で振り向く純くんを追いかけた。

地下鉄の中村公園駅から地上に出ると、真夏の太陽がギラギラ照りつけていた。紫外線を避けるため、早速、夏ストールで真知子巻きにした。

目の前に、立派な赤い大鳥居が建っていた。ぼんやり眺めていると、どこからか鎧兜に身を包み、派手な陣羽織をまとった小柄な武将が現れた。こんな所で「おもてなし武将隊」の人に会うなんて珍しいことだ。白い髭から高齢の武将だとわかる。

すると突然、「これこれ、そのくノ一、中村はこのあたりかの」と老将が尋ねた。衣装だけでなく言葉までも完全に武将になりきっている。女子高生の私を、地下の抜け道から出て来たくノ一と思っているらしい。多分、このストールのせいだ。

武将は赤鳥居を指さして「これはいつ建ったのじゃ。某（それがし）が子どもの頃はなかったぞ」と聞いてきた。「1929年だから、今年で97年になりますよ」と答え、さらに4年ほど前、鳥居を赤から金色に塗り替える案が出て、住民の間で賛否両論の大きな議論となったことを付け加えた。

「そうか、そのようなことがあったのか。某は派手なものが好きじゃから、金色にした方がええのう」

「金色だとインスタ映えするわね」

「インスタバエか。聞いたことのないハエじゃのう。近頃出てきた奴か」

簡単な説明の後、話題を変えた。

「今日はどこへ行かれるんですか」

「久しぶりに某の生まれ在所が見たくなったのじゃ」

聞けば、この鳥居からまっすぐ北の方に行くという。中村公園にある「大河ドラマ館」を見に来た私と同じ方向だ。二人で松並木の参道を歩いて行つた。甲冑が重いのか老将は少し遅れ気味だった。汗を拭きふき15分ほどでやっと公園の入り口に着いた。

「確か、在所はこのあたりですよ」

振り向くと、武将の姿はどこにも見当たらなかった。

「こんなところに大きな鳥居あるんだ」

高校時代の友人が赤い大鳥居を見つめた。小中高とずっと同じ学校で一番の仲良しだった彼女と、一五年ぶりに再会した。

「さあ、ここで問題！ なんの鳥居でしょう？」

私はニヤリと笑みをこぼしながら尋ねた。

「え、知らないよ。ヒントはヒント」

「んー、歴史上で有名な人」

「幅広っ！」

「本当に有名だって。思いつく歴史上の人物言っていいたら絶対出てくる」

「えー、徳川家康」

「あ、いきなり惜しい！」

「織田さん？」

「あー、そういう方向性！」

「明智光秀」

「わざとやん！ その流れでそこいかないって」

「あ、豊臣さんだ」

他愛もない話が心地よい。十五年という長い月日が、少しずつ埋められていく気がする。

「ねえ、私さ、実家の喫茶店建て替えてカフェするつもりなんだ」

「え、めっちゃすごいじゃん。調理学校行ってたもんね」

「一緒にやらない？」

「え……でも」

友人の顔から笑顔がすっと消えた。彼女は大学で経営を学び、卒業後は店を経営していたが、軌道に乗らず今は〇〇をしていた。

「私さ、料理は得意なんだよね。でも経営の知識とか全くないし。自分の店って憧れじゃん」

「でも、私、一回失敗しちゃってるし……」

小声で足元を見つめる友人の背中をバンッと叩いた。

「なーに言ってるの！ 失敗はつきものだって。私はさ、失敗したっていいと思ってる。好きな人と好きなことできたら、また次行けばいいやーって思えるもん」

「私でいいの？」

「あったりまえじゃん！」

私は友人の手を引いた。

「このおっきい鳥居と一緒に通って、豊臣さんみたいに天下取ろう！」

友人は、少し困ったような笑顔で頷いた。

「せーの、天下取ったるで！」

二人で大きくジャンプした。

十月の名古屋は、ようやくに残暑が去って涼しくなった。

以前、妻と歩いた中村公園駅の大鳥居前は相変わらず自動車が多い。脇からエンジン音に負けぬ声が響いた。

「手紙の公開、思い直してはもらえんか」

隣で両手を合わせて拝み倒してくる男は秀吉だ。妻の実家で見つけた古文書が秀吉直筆の手紙とわかり、大学に調査を依頼してから現われた。

「無理ですね」

あきらめさせるため、わざと冷たく伝える。

猿よりも、ネズミよりも、目から口にかけてやや面長な印象の小男は、化けて出るくらいに手紙の公開を恥ずかしがった。

「太閤殿下、妻にあてた恋文なんて書くのがいけないですよ。まあ一部の研究者はともかく、下々のものは一時の話の種にしても、すぐに忘れます」

クロマツの続く参道の先に、四半世紀ぶりに訪れる豊国神社がある。なんとも情けない顔で、かつての天下人は地団駄を踏んだ。

「ええ、もう。四百年後に恥を搔くことになったわ。ねねの奴め、なんで焼き捨てなんだのか」
なだめようとして、私はありえないものを見た。

死んだ妻がクロマツを背に立っている。

だが没年齢よりずっと若い。四半世紀前の姿のまま、覚えのある朝顔模様の浴衣を着ていた。あの頃、妻の地元である中村公園の夏祭りに毎年出かけていた。

「……太閤殿下は幽霊なんですか」

「さあ？ 文に憑いた化生という自覚はあるが、死んで蘇った訳ではない」

目の前の妻も幽霊ではないのか？ 何かに執着する化生？

《待っているから》

声でなく直接、言葉が脳に届く。それはきつと、妻が発しただけでなく記憶の底から蘇った言葉だからだ。

夏祭りの、他愛のない文の約束。

幽霊のような太閤殿下を連れて歩けば、亡き妻に会えるかも知れない。

そんな淡い期待よりも確かな夏の記憶に、私は打ちのめされた。

「次の墓参りに、持って行きます」

ねねが文を捨てなかった気持ち、妻の中に見つけた気がする。
もてる男はつらいの、と秀吉が楽しげに笑った。

『名駅の東側に住む私』にとって『名駅の西側にある中村公園駅』は、なかなか縁のない場所だった。

たしか小学校低学年のころ、土地勘のないまま母に連れられて一回だけ行ったことがある。地下鉄の駅から出るとすぐに、あの真っ赤な巨大鳥居が視界に飛び込んできた。あまりの怖さに泣いてしまった記憶はある。当時の私にとっては、見上げるほどの大きなものはとにかく何でも恐怖の対象だったのだ。

「ママ。あれ、こわいよ。はやくかえろう」

服の裾を引っ張って必死に伝えても、母は「今来たばかりだから」「用事があるんだから」と笑ってばかり。『なんでわかってくれないんだ。鳥居が動き出して、今にも襲ってくるかもしれないのに！』なんて、子どもながらに憤ったような気がする。あの頃はゴジラが流行っていたっけな。

それから二十年ほどの月日が経った。

ある日、友人との飲み会が中村公園駅近くで行われることとなった。彼女の家が中村公園近くにある、おすすめの居酒屋があるとのことだった。

私にとっては実に二十年ぶり、二回目となる、あの巨大鳥居との再会。待ち合わせ場所だった地下鉄の一番出口を出ると、大鳥居は変わらずそこにあった。そして、変わってしまった私はもう、怖さを感じることはなかった。

酒のつまみの話として、幼いころのあの苦い思い出を友人に話してみた。友人はビールをぐくくと飲みながら、彼女の思い出を教えてくれた。

「ここが地元の私にとっては、あの赤鳥居を見ると安心するんだよね。ああ、帰ってきたって感じがする」

『名古屋駅の西側に住む彼女』にとっては、ずっとそこに在り続けて見守ってくれている存在だったのだろう。

帰り道、夜の街にそびえ立つ鳥居を見て「動き出すわけがないのに、あの時は怖かったんだよね」と、幼い自分を慰めながら一人で笑った。

「鳥居って、神様の玄関みたいなものらしいね」

中村公園の交差点を南から北へ向かいながら、俺は助手席のユウマに話しかけた。この交差点は五差路になっていて車線が少し複雑だが、近所に住み始めて五年、今では身構えずに通過できる。

「そうになると、俺達は今から、神様の家に土足どころか車で侵入するわけだ」

ユウマは続けて、じゃますんでー、と軽い感じで言った。

吉本新喜劇か、と突っ込もうとした時、カーナビから声が上がった。

『邪魔スナラ帰ッテー』

ユウマと俺は言葉を失った。顔を見合わせたいところだが、運転中だったため、全力で意識を前に向ける。しかし、そんなことで動揺は消せない。

「何、今の」

それはユウマの声か俺の声か。いずれにせよ共通の感情だろう。

「ユウマがふざけたことを言うから、かえって怒らせたんじゃないのか」

怒らせた？何を？神様を？まさか幽霊ではないよな？自分の言葉が逆に混乱を助長する。バイト時代の仲間が、豊国神社の夜はヤバイぞ、と言っていたのを思い出した。

「まさかそんな、どんだけ心の狭い神様なんだよ」

おいバカ余計に煽るな。

「なあ、カーナビの新しい機能とかじゃないよな、どうしたらいいんだ？」
動揺したユウマに聞かれるが、そんなもん、むしろ俺の方が聞きたい。この車もカーナビも俺のだぞ。

ただ、そんなことより気になるのが。

「ユウマ、あのさ、なんかさっきから：あまり車が進んでない気がするんだけど」

本来なら五差路から神社前の丁字路まではすぐである。が、特段に低速走行しているわけでもないのに、なぜか丁字路に着かない。なんだか騙し絵の中をぐるぐる走っているような気分である。

「お、おい、どうすんだよ、これじゃ帰って言われても帰れないぞ」

ユウマの慌てた声で名案を思い付く。

「分かった、それだ！」

息を整え、緊張しながら言う。

「ほな帰るわ」

気付くとそこは丁字路で、カーナビが言った。『まもなく、左折です』

全ての手続きを終え、金山駅に着いたのは朝々時半だった。父と二人で空いている店を探す。

「ここでええか？」

「うん」

煌々と光る店内に包まれる私たち。

私と父は、家でもほとんど会話がない。

「あいつと初めて会った時はなあ、どえりゃあ綺麗でよお。金のかかりそうな女だなあと思ったんだわ」

聞いてもないのに、突然話し出す。

「でもよお、あいつがデートでワゴンセールに飛び込んだんだわ。俺はその時に結婚しようと思ったんだ」

「知らなかった。そうなんだ」

父と二人で外食することなんて片手で数えられるほど少なく、何を話したらいいのかもわからない。

いつもより、バーガーはしょっぱかった。

「明日も大学あるのか？」

「あるよ」

「俺は朝早く出るから、鍵かわなかんぞ」

「うん、わかった」

父が泣いているのを見たのは、たったの三回だ。

ひとつは私の卒園式。

次に、飼っていた犬が亡くなった時。

そして、今日だ。

朝の時過ぎ。

いつもは人でごった返している金山駅に、涼しい風がそよそよと抜けていく。

今日もこれから駅は沢山の人を吸い込んで吐き出す。

もうすぐ始発が動く。

私はふと思いついた。

子供の時、泊りの修学旅行で親の顔と声を思い出せなかったことを。

毎日見ているはずなのに、意識しなければこんなにも人の記憶は脆いものなのだった。

後日、病院から電話があり、父と二人で母を迎えに行くことになった。

小さくなった母はわたしの横に座った。

久々に二人で車に乗った。

帰りに、お線香と母の大好きな鰻とイチジクを買った。

あの日から10年が経った。

父とは年に数回出かけ、誕生日には二人で鰻を食べに行く。

母の顔も、声も、もう思い出せる。

あの日、金山駅でそよそよ吹いた風のことも。

いつもより、バーガーがしょっぱかったことも。

その日、大怪盗Nが弟子とともに降り立ったのは、多くの人が行き交う「金山駅」だった。
「なかなか賑わいがあるな。さて、ここで何を盗もうか――」

怪盗はむき出しになった天井の梁の上から、人の波を眺める。隣で弟子が、地図を広げた。
「師匠、この近くには美術館があるようです。行ってみますか？」

「高価なだけの美術品は盗み飽きた。何かもっと面白いものはないのか？」
彼は懐から双眼鏡を取り出し、辺りを見回す。

「ほう、この駅の名前には『金』がつくのか。縁起が良い。よし、これを盗むとしよう！」
華麗に跳躍すると、怪盗は至るところに表示された駅名から、あっという間に「金」を盗んだ。

すると、改札付近で電話をしている人が、
「今ちようど、『山駅』に着いたところ……あれ？」

窓口で切符を买おうとしている人が、
「ええと、『山駅』から東京駅までの往復で……ん？」

首を捻りながら「山駅」を連呼する。駅員も乗客も皆一様に物足りない顔で、電光掲示板を見上げていた。

「ハッハッハ！ 皆、何が盗まれたのか気付いていないぞ。愉快愉快！」
盗んだ大量の「金」を抱えながら、怪盗は高らかに笑い声をあげた。

「しかし師匠、そんなにたくさん『金』、全部は持って帰れませんよ」
「うーむ、それもそうだな」

怪盗が唸ったその時だった。
びゅう、と強く吹いた風が、怪盗の手から「金」を攫う。

「しまった！」

慌てて見下ろすと、ちようど真下を清掃員が歩いていた。盗んだ「金」は、その人が押していたカゴの中に落ちていく。

「ああ、残念だ。せっかく盗んだ『金』だったのに」
名残惜しそうな怪盗の肩を叩いて、弟子が地図を指さした。

「師匠、どうやらここから少し離れた名古屋城には、金のしゃちほこがあるようです」
「なに？ 金のしゃちほこだと！」

怪盗はたちまち目を輝かせた。
「盗み甲斐がありそうだ！ 行くぞ！」

大怪盗Nはマントを翻し、颯爽と「金山駅」をあとにした。

ふと気がつければ、いつの間にか父母の亡くなった年を超えてしまいました。今は、桑名市で息子夫婦と同居しております。

この年になりますと、よく忘れます。家族からは、認知症だからかわれています。だけど、一つだけ絶対に忘れてはいけなと思っています。それが「あの方」との思い出…。

あの戦争の前後、私は金山、東雲町に住んでいました。あの方、Kさんとは、名鉄の東西の線路がつながり、金山駅が出来た頃、知り合いました。背が高く、涼し気な目をした人でした。

小さな駅舎かホームで、一緒にいました。二人とも、行く先は名駅で、それぞれの学校へ通学する為でした。乗車時間は短く、会話はほんの少しです。何もしゃべらなくても、彼のそばに居ることだけで幸せでした。

「文江さん」

やや低い声で呼ばれると、身体がぞくぞくしました。

彼は、本が好きでした。しかし、私は、そちらの方にはうとく、良い応答が出来ず、Kさんはさぞかしご不満だったでしょう。そんなお付き合いがしばらく続きました。

突然、悲劇が起きました。名古屋大空襲です。確か昭和20年の空襲では、金山のあたりも激しい爆撃を受け、駅のすぐ北側にあった専売局の煙草製造工場などが破壊されました。多くの人が死に、多くの建物が瓦礫と化し、金山駅なども燃えてしまいました。

やがて、少しずつ復旧が進みましたが、Kさんには会えませんでした。彼のお家は全焼し、連絡のすべはありません。どこかへ疎開されたのか。それとも…。いやな想像は、すぐに振り払いました。どこかで生き延びておられるに違いない。そんな思いのまま、今日まで来しました。

名古屋に用事があるという息子の車に乗せてもらって、金山を回りました。まったく別の町のようでした。駅は、大きく新しくなっていました。金山総合駅というのだそうです。でも、私の心の目は、昔の小さな駅、そしてその前にたたずむKさんの面影を見つめているだけでした。

「てめーら、もつとテンションあげて行こうぜ！」

金山駅方面から響く叫び声に私は全力で舌打ちを返しつつ、中々青にならない信号をキッと睨みつける。

（こちらら、今日で数十連敗。ヒールも片っぱ折れて足は痛いし、真夏にスーツで汗だくだつてのに、何がテンションよ）

就職先が決まらないのは、実力に見合わない大手ばかり受けているから。スーツは見るからに安物な上、度重なる面接でくたびれ始めている。自分に原因があると分かっているけど、それを認めてしまえるほど大人ではなくて、ネットに愚痴を描き込んで溜飲を下げるばかり。

イライラした気持ちに限界に達する前に信号は空気を読んで青になり、ペツと吐き出されたツバのように人々が一斉に歩き始める。

その間もアスナルから響く音楽は鳴りやまず、文句でも言ってるやろうかという気持ちになって歩を向けると、想像していた五分の一程の明らかに冷やかしの多いステージにぎよっとする。

（これであんな声出してたの？）

他人事なのに恥ずかしくなり、同時に馬鹿にしたような感情も浮かぶ。自分の足が地についていないようなところで頑張っても空回るばかりなのに、なんでそんなに必死になれるのか分からない。

それでも、ステージから目が離せなかった。

叫び過ぎて掠れた声のボーカル、どこかズレてしまっている演奏。ハッキリ言って全然上手くないのに、汗だくで前を向き自分たちを表現するバンドのメンバーたちは、とてもカッコいい。

気づいたら私の目からは涙が流れていて、横にいたカップルがギョッと逃げないように離れていく。

ダサくても、無謀でも、やりたいことがあって受け始めた、その気持ちを思い出す。

グツと目をこすって片方だけ残っていたヒールをペキッと折ると、プライドも同時に折れて、何だか心がすつと軽くなった気がする。

（たしか、アスナルって靴屋あったよね？）

無理に背のびし過ぎない平坦な高さはどこか新鮮で、自然と笑顔があふれた。

高校一年の私と真夏にとって、金山総合駅は避難所であり、「ホーム」だった。

私の父も母も、仕事でほとんど家にいなかった。真夏の家では、仕事を失ったお父さんが昼間からお酒を飲んでいた。家に帰るのが嫌だった私たちは、放課後を金山で過ごした。駅に隣接し、開業間もないアスナル金山で、店を見て回ったり、ライブイベントを眺めたりしながら、くだらない話をして笑った。家では笑えない分、ここで思いっきり笑った。

仕方なく帰る時間になると、私は「R、真夏は名鉄へ向かう。」Rと名鉄のホームは並んでいる。改札で別れたはずの私たちは、ホームに下りると線路を挟んで向かい合った。話すことはできない。思わず右手の指先を頭の上に付けた。「サル」。真夏はぷつと吹き出し、そして右手の人差し指で自分の鼻を持ち上げた。「ブタ」。それが、ホームを隔てた私たちの「じゃあね」「またね」の合図になった。

ある日、真夏が学校に来なくなった。「夜逃げしたらしい」と噂だけが残った。それから、二十年が経った。

私は家を出て、営業の仕事をしている。その日は、得意先へ向かうため、久しぶりに金山駅の「R」のホームに下りた。自然と隣の名鉄のホームに目が行く。そこに、四歳くらいの子と母親がいた。並んだホームに次々と止まる電車を指差し、男の子が母親に何かを話している。二人は顔を見合わせて笑った。その母親の笑顔が真夏のそれと重なった。思わず大きな声が出た。ふと、母親がこちらを向いた。

少し迷い、私はそろりと右手の指先を頭に付けた。「サル」。母親が目を見開いた。それから、顔を綻ばせ、するりと鼻先に人差し指を当てた。「ブタ」。

その後、双方のホームに赤い電車とシルバーの電車が滑り込んできた。お互いの姿が消えていく間際、私たちは大きく手を振り合った。